広島芸術学会活動報告

一九九九年七月〜二〇〇〇年六月

米門公子

▼平成十一年七月十日(土)

会報第五十三号を発行。掲載記事は、第四十八回例会報告①「ウィリアム・モリスとそのデザイン」(報告者・玉田さゆり)②「呉市入船山記念館見学記」(報告者・上野仁)、広島芸術学会第十三回総会・大会の案内と研究発表の要旨など。

▼平成十一年七月二十四日(土)

第十三回総会・大会を広島大学法学部・経済学部東千田校舎四〇二号室で開催した。午前九時半から十時までが総会。進行役は吉井章氏が務めた。金田晉代表委員の挨拶の後、水島裕雅委員を議長に任命。青木孝夫委員が平成十一年度の事業報告、大橋啓一事務局長が決算報告、続いて林立雄監査委員が監査報告をし、承認された。続いて、青木孝夫委員が平成十二年度の事業計画を説明、大橋啓一事務局長が予算案を発表し、そのまま承認された。

十時から大会開始。午前中に三つの研究発表①広島大学大学院、赤坂こずえ氏の「モーツアルト作曲・歌劇『魔笛』とパストラル」②ふくやま美術館、谷藤史彦氏の「ファシズムとマリオ・シローニ―壁画《芸術と科学のイタリア》をめぐって―」③広島大学大学院、亀井克朗氏の「アンドレイ・タルコフスキーにおける異他性と親近性―『ストーカー』について―」が行われた。

午後から研究発表④福岡大学、大島由起子氏の「ハーマン・メルヴィルの『リップ・ヴァン・ウィンクルのライラック』における反アメリカン・サブライム」⑤広島市立大学、武藤三千夫氏の「自然について―環境美学の視点から―」が行われ、引き続いてシンポジウム「私たちの環境は芸術的か？―環境美における伝統・日常・深化―」が開催された。司会は広島大学の安西信一氏、パネリストは龍谷大学の宮元健次氏、富士クリエイトの高石勝氏、広島大学の若尾裕氏が務めた。

▼平成十一年九月十日(金)

会報第五十四号を発行。掲載記事は巻頭言に中畝みのり氏の「作品に迫る」、第十三回大会報告(報告者・研究発表①／播野尚子、研究発表②／水木祥子、研究発表④／安西信一、研究発表⑤／長迫英倫)など。(研究発表③とシンポジウムについての報告は投稿が遅れたので、次号に延期)

▼平成十一年九月二十五日(土)

広島県立美術館講堂で第四十九回例会を開催。例会コーディネーターは広島大学の長田年弘氏が務めた。テーマは「天才」。最初に研究発表を行ったのは、留学先のスペインから一時帰国していた広島大学大学院の吉本由江氏。スペインを代表する画家の一人エル・グレコの人と作品についての解釈を発表した。

続いて、早稲田大学の真野宏子氏が、「カンディンスキーのキュビズム観」と題し、カンディンスキーとキュビズムの繋がりについての考察を発表した。

▼平成十一年十月十九日(火)

広島芸術学会初めての演奏会「ヨゼフ・ハーラ&中畝みのりデュオ イン オータム」を広島市中区の広島県民文化センターで開催した。会員でヴァイオリニストの中畝みのりさんが、厳しくなっている当学会の財政的事情にいくらかでも寄与することができればと、協力を申し出て下さり、実現した企画。会員の方々も一生懸命チケットを売って下さり、約三百五十人もの参加が得られ、成功裏に終えることができた。収益は約十四万円。

▼平成十一年十一月二十五日(木)

会報第五十五号を発行。広島大学、長田年弘氏による巻頭言「奇人礼賛 ―詩人と哲学者の肖像―」、投稿が遅れていた第十三回大会の報告〈研究発表〉「アンドレイ・タルコフスキーにおける異他性と親近性―『ストーカー』について―」(報告者・大石和久)と〈シンポジウム〉「私たちの環境は芸術的か？ 環境美における伝統・日常・深化」(報告者・青木孝夫)、第四十九回例会報告①エル・グレコ解釈の変遷 (報告者・森園敦) ②「カンディスキーのキュビズム観」(報告者・亀井克朗)を掲載した。自由コラムには会員の袁葉氏が「隠土文化との出会い」というタイトルのエッセイを寄せた。また、十月十九日に開催した広島芸術学会コンサートの実行委員長・水島裕雅氏が、「演奏会を終えて」と題し、お礼と報告を誌上で述べた。

▼平成十一年十二月十一日(土)

第五十回例会を広島県立美術館講堂で開催。例会コーディネー

ターは広島大学の樋口聡氏。最初に広島大学大学院の須崎朝子氏が、「演劇ワークッショプにおけるインプロヴィゼーションについての一考察」というタイトルで研究発表を行った。続いて、ベルリン自由大学からの客員教授であるグンター・ゲバウア氏が、「手についての美学的考察」と題して、「手」の持つ身体性の問題を美学的視点から考察した。

例会の後、年末恒例の忘年会で楽しく談笑した。

▼平成十二年二月七日(月)

会報第五十六号を発行。掲載記事は巻頭言に井野口慧子氏の「骨折のすすめ」、第五十回例会報告①「演劇ワークッショプにおけるインプロヴィゼーションについての一考察」(報告者・中尾和恵)、②「手についての美学的考察」(報告者・上野仁)、自由コラムにはフリーライター・米門公子のエッセイ「神様が残してくれたもの」を掲載した。インフォメーションでは、この春、広島大学を退官し、新たに東亜大学で教鞭をとることになった当学会代表委員・金田晉氏の広島大学における最終講義「隠喩としての美学 ―飛べない天使―」の案内を掲載した。

▼平成十二年三月四日(土)

第五十一回例会を広島県立美術館講堂で開催。今回の例会コーディネーターは広島大学の長田年弘氏が務め、テーマは「広島の芸術、過去と現在」。一つ目の最初の研究発表は、広島県立美術館の知念理氏が「厳島図の振幅」と題し、十七世紀後半に制作された厳島図(広島県立美術館所蔵)を紹介した。続いて二つ目の研究発表では、広島に縁の深い画家・南薫造のパリ滞在時代の様子を、島根県立国際短期大学の八田典子氏が現地での調査を基に紹介した。タイトルは「南薫造のパリ滞在とその周辺」。

▼平成十二年四月二十八日(金)

会報第五十七号を発行。掲載記事は、巻頭言に菅村亨氏の「贋作(にせもの)雑感」、第五十一回例会報告①「厳島図の振幅」(報告者・森園敦)②「南薫造のパリ滞在とその周辺」(報告者・尹芝恵)を掲載した。平成十二年九月に開催する広島芸術学会第三回芸術展示「制作と思考」の出品者が決定したので、その氏名と分野を発表した。

▼平成十二年五月二十一日(日)

第五十二回例会は毎年恒例の野外例会。今回は足をのばし、マイクロバスを貸切り、しまなみ海道を通って伊予・大三島での見学会とした。会報第五十七号で案内をし、参加者を募ったが、残念ながら八名のみの参加となった。

朝九時にJR広島駅北口を出発、山陽自動車道→尾道大橋→因島

大橋→井口橋→多々羅大橋→村上大三島記念館→大山祇神社（宝物館）→大三島美術館の道順で回った。今回は参加者は少なかったものの、広島大学の菅村亨氏による解説付きだったので、美術館や宝物館の展示物の時代背景などがよく分かり、内容の濃い見学会となった。

帰り道、山陽自動車道・広島東インターのゲートで、わき見運転の若者の車に追突されるというハプニングはあったが、全員けがもなく無事だった。この事故で予定よりは少し遅れたが、明るいうちにＪＲ広島駅北口で解散し、それぞれが帰宅の途に着いた。

《平成十二年六月三十日現在、法人会員十法人、個人会員二百三十四名（特別会員五名、一般会員二百六名、学生会員二十三名）》。

（こめかど・きみこ　広島芸術学会事務局）